

馬に関するイメージ考察

—中国のことばと文化

鄭 高 咏

要 旨

「馬」という字は3000年以上前の甲骨文や金文に見られ、巧みに馬の姿を捉えたその字形からは躍動感が感じられる。この字の発展と変遷をたどると漢字発展の規則性が見えてくる。複雑から単純へ、具象から抽象へと段階的な記号化を経て、線で構成される「馬」という形に至った。「馬、牛、羊、豕（豚）、犬、雞（鶏）」は古代中国で最も早く飼い慣らされた家畜で、この六畜の筆頭が馬であり、かつて馬は主要な交通手段として人間の生活と密接にかかわっていた。「馬」の字を偏や旁とする漢字は300以上にも及び、馬にまつわる文化現象も数多い。例えば不世出の名馬を“千里馬”、軍馬が馳せ参ずるや瞬く間に勝利することを“馬到成功”、国家の大事を解決することを“汗馬功劳”（勲功）を立てたなどというが、いずれも“以馬及人”（馬を基準にして人間を見る），“以馬及物”（馬を基準にして物事を見る），“以己度馬”（自分を基準にして馬を見る）という観点に立脚した表現である。馬の文化に関しては、これまで多くの学者が文学作品や詩歌、考古学の角度から詳細な研究を行ってきたが、本稿では日常よく用いられる成語、熟語、ことわざ、常用単語、そして民話、十二支に重点を置き、これらの角度から馬の文化的意義を探り、そこから浮かび上がってくるイメージをまとめたいと思う。

キーワード：馬，言葉，成語，熟語，ことわざ，語彙，民話，十二支

0 はじめに

文化と密接に結び付いている言葉は、それ自体が一種の文化現象である。しかしこの両者は単純な入れ子の関係にあるのではない。言葉は文化の記号であって、文化を記録し伝播する媒体である。言葉に対する文化の浸透力は絶大で、言葉にはあらゆる文化形態、文化意識の痕跡がとどめられている。生産や生活の中で生じる諸々の観念はまず言葉として固定化される。民族の言語はその民族特有の文化様式を反映し、民族特有の文化がその民族の言語にさまざまな影響や制約を与えるものなのである。中国語は動物文化の多大な影響を受けたが、とりわけ馬文化のそれは計り知れない。馬は人間にとって身近なパートナー、生死を共にする友であり、狩猟、牧畜、農耕、交通、戦争と生活のありとあらゆる場面で重要な役割を果たしてきた。馬は生活の源と交通の便をもたらし、かつ精神的信仰の対象ともなった。各方面における馬の物質的、精神的役割は数千年にわたって中国人の心に強く刷り込まれ、集合的無意識を形成したことから、やがて馬は人々が物事を認識する際の尺度となり、言語面でも「馬」やそれにまつわる文化現象によって感情を表すという、独特の言語習慣が生まれたのである。また実にさまざまなものの名にも馬という字が使われている（例えば植物なら“馬兰”〈バリシ〉，“馬齿菜”〈スベリヒユ〉，“马尾松”〈クロマツ〉，“马蹄莲”〈オランダカイウ〉，“马铃薯”〈バレイショ〉など、動物なら“马蜂”〈スズメバチ〉，“蚂蚁”〈アリ〉など、地名なら“马厂”〈河北〉，“马龙”〈雲南〉，“马头”〈湖北〉などがある）。“马力”（馬力），“马达”（モーター）など、外来語の訳語にも馬を冠するものがあり、馬という言葉でその特徴を表現している。“马达”は英語motorの音訳であるが、その回転速度の速さから、翻訳の際に疾走する駿馬がごく自然に想起され、“mo”の音に「馬」という字を当てたのであろう。“马力”は出力の単位であり、1秒あたり75キログラムメートルの出力量を1馬力とする。中国語ではこの二文字で出力の単位を表すが、その語源をたどるとやはり馬の力に由来している。馬の文化、馬のイメージ、馬の寓意を言葉から探求し、馬の文化とシンボライズされた姿を今日に伝わる民話と十二支における馬から探求する。これが本稿の主たる考察対象であり、文学作品や詩歌、考古学などの角度からの考察については多くの先行研究があるため、本稿では取り上げなかった。

1 「馬」の字源

「馬」は人類が“驯化”（飼い馴らす）した動物でも最古の部類に属し、人類と深いパートナーシップを築いてきた。これを裏付けるのが“驯化”や“驯良”（従順）といった言葉の“驯”であり、その部首はほかでもない馬偏である。また「馬」を偏、もしくは旁と

馬に関するイメージ考察

する字は300以上、熟語となると膨大な数に上り、このことも「馬」と人間の親密度の高さを物語っている。

「馬（马）」という字は「馬」の姿をかたどった象形文字であり、その甲骨文字は側面から見た1匹の馬の形をしている（図1参照）。



図1

図1を横にすると、頭、目、口、たてがみ、胴、足、ひづめ、尾に至るまで忠実に描かれているのが分かる。賢明な古代人はかくも簡単かつ平明な手法で象形文字を作り出したのだが、このような描画法は文字として常用するには適さず、やがて農牧業や、新興の青銅鑄造工業の生産拡大のテンポに次第についていけなくなった。そこで春秋戦国時代には図2・3に見られる金文が相次いで現れた。甲骨文字よりもはるかにシンプルになったものの、大きな目、房状の尾、そして長いたてがみという特徴をとどめており、この時点でもまだその字形から意味を判断することが可能である。



図2



図3

秦時代の小篆の「馬」（図4）では、たてがみ、頭部、目が融合して3本の横棒となった。また下部は4本の足に変わり、しっぽから毛がなくなったものの、まだどこことなく原形をとどめている。



図4

けれども「隸変」（篆書から隸書への移行）が“古文字”（秦以前の文字）と“今文字”（漢

以後の文字)の分水嶺となり、それまでは線で記すことに重点が置かれていたが、これより後は書きやすさが追求されるようになった。こうして漢代の隸書(図5)や楷書(図6)以降、「馬」の4本の足は四つの点で表されるようになったが、字義は分かりにくくなってしまった。

図5

図6

魏・晋時代の王羲之の『澄清堂帖』には草書の「馬」(図7)が見られるが、この草書を楷書化したのが、今日用いられている簡体字の「馬」の字(図8)である。

図7

図8

中国最古級の字書、『説文解字』では漢字を540の部首に分類しており、ここには既に「馬」部が設けられている。その後も数々の字書が編まれたが、馬部が削られることはなかった。馬の字を含む漢字の数は『爾雅』で約45、『説文解字』は約120、『玉篇』は約270余り、『康熙字典』は約500余り、『漢語大字典』では約620とされている。『説文解字』の120から『漢語大字典』の620へと、実に5倍にも膨れ上がり、「一大『馬』ファミリー」を形成しているのだが、これらの漢字は、馬の年齢や大きさを表したり、馬の色や性別を表したり、馬の形状や動作を表したりと、ことごとく馬にちなんだ字義を有しているのである。

2 「馬」のさまざまな呼称

文字学の資料によれば、古代の馬には「馬」という抽象的な総称のほか、毛色、年齢、性別、大きさなどによって個別の呼称があった。現代人は馬を細かく呼び分けせず、“公马”(牡馬)、“白马”(白馬)、“小马”(子馬)のように、語根「馬」に性質や色、状態を意味する語をつけるのがせいぜいであるが、古代人は非常に具体的かつ詳細に区別していた。

① 年齢別

1歳の馬は“馬”という。『説文』に“馬，马一岁也。从马一。”（馬は1歳の馬であり，馬の字に一を添える）とある。2歳の馬は“駒”，『説文』に“马二岁曰駒。”（2歳の馬は駒という）と記されている。3歳の馬は“駘”で，『説文』に“马三岁曰駘”（馬の3歳のものは駘という）という文が見られるが，“駢”ともいい，『説文系伝』には“马三岁曰駢”（馬の3歳のものは駢という）との記述がある。4歳の馬は“駘”，『玉篇』に“駘，马四岁也。”（駘は4歳の馬である）とある。8歳の馬は“駘”であり，『説文』に“駘，马八岁也，从马从八。”（駘は8歳の馬であり，馬偏に八を添える）と記されているが，“駘”ともいい，『集韻・有韻』には“马八岁谓之駘。”（8歳の馬は駘という）とある。

漢字を見る限りでは，1～4歳の馬にはそれぞれ特定の呼称があるが，5歳以上の馬になると一部の例外を除き，ほとんど呼び分けされていない。これは恐らく，4歳以下の馬は年齢に応じて異なる調教が必要な子馬，5歳以上の馬は一人前の役畜として扱われたからであろう。

② 大きさ別，性別

大きさにより，“童马”（子馬），“马驹”（小馬），“六尺马”（六尺馬），“七尺马”（七尺馬），“八尺马”（八尺馬）などに分類されていた。

小さな馬は“驄”（『正字通』：“驄，小马。”〈驄は子馬である〉），“駒”（『説文』：“马二岁曰駒。”〈2歳の馬を駒という〉），“騊”（『集韻・脂韻』：“马驹谓之騊。”〈小馬は騊という〉），“駘”（『字彙』：“駘，小马。”〈駘とは小馬である〉）と呼ばれていた。体高が六尺以下のもは“駒”，六尺の馬は“驄”（『説文』：“马高六尺为驄。”〈背丈が六尺の馬は驄である〉）あるいは“騊”（『切韻・翰韻』：“騊，马高六尺。”〈騊は背丈が六尺の馬である〉）といった。六尺以上のものは“馬”（『周礼・夏官・廋人』：“（马）六尺以上为馬。”〈六尺以上のものは馬である〉）七尺の馬は“駘”（『周礼・夏官・廋人』：“马七尺以上为駘。”〈七尺以上の馬は駘である〉）八尺以上になると“童”（『周礼・夏官・廋人』：“马八尺以上为童。”〈八尺以上の馬は童である〉）と呼ばれた。

また性別による呼称も数多い。牡馬は“駘”（『説文』：“駘，牡马也。”〈駘とは牡馬である〉），“駘”（『玉篇』：“駘，牡马也。”〈駘とは牡馬である〉），“駘”（『集韻』：“駘，牡马。”〈駘は牡馬である〉），“駘”（『説文』：“駘，牡马也。”〈駘とは牡馬である〉）といった。牝馬には“騊”（『正字通』：“騊，俗呼为牝马，即草马。”〈騊は俗に牝馬といい，雌の馬のことである〉），“騊”（『爾雅』：“牝曰騊。”〈雌は騊という〉），“騊”（『玉篇』：“騊，牝马也。”〈騊とは牝馬である〉）という呼称があった。去勢された馬は“騊”（『説文』：“騊，牝马也。”〈騊とは去勢された馬である〉），“騊”（『字彙補』：“騊，牝马也。”〈騊とは去勢された馬である〉），“騊”（『本草綱目』：“马去势曰騊。”〈去勢された馬は騊という〉）と呼ばれた。

③ 毛色別

大まかに述べると、まだらの馬は“駮”，白黒のぶちのものは“駮”，黄色と白の混じったものは“駮”，ところどころ白い毛がある浅黒い馬は“駮”，唇の黒い白馬は“駮”，漆黒のものは“駮”，黄色と赤の混じったものは“駮”，赤毛の馬は“駮”，浅黒い馬は“駮”，紫の毛のものは“駮”，赤白のぶちの馬は“駮”，額に白い星のあるものは“駮”という。ほかにも数々の呼称があり，枚挙にいとまがない。

古代人がこれほど馬の色に重きを置いたのは，恐らく馬の鑑定術¹⁾と関係があるのだろう。馬は古代の帝王の祭祀，戦争，狩猟，行幸などの面で重要な役割を果たしていたが，こうした大規模な行事となれば，その選別もまた重大事である。夏・商・周の時代は王朝によってそれぞれ尊ぶ色が黒・白・赤と異なっており，祭祀のいけにえや戦時に用いる馬の色もこれに準じていた。

④ 優劣別

良馬は“駮”，“駮”，“駮”，“駮”，“駮”，“駮”，駮馬は“駮”，“駮”，“駮”，“駮”といった。

3 言語における「馬」及びそのイメージ

ここでは比較的よく用いられるものを挙げるにとどめる。

A. 成語

① “马首是瞻”（馬の首を仰ぎ見る²⁾）

この語は『左伝・襄公十四年』の“荀偃令曰：‘鸡鸣而驾，塞井夷灶，唯余马首是瞻。’”に由来する言葉であり，荀偃が「鶏が鳴いたら馬を車につなぎ，井戸を埋め，かまどをふさげ。そして私の馬の鼻先を見よ。その示すところこそ諸君の進むべき方向である」と命じた，というのがその文意である。この成語は後に指示に従う，あるいは人に追従することのたとえとなった。

② “马不停蹄”（馬がひづめを休めない）

この成語の出典は『元曲選・王実甫二』の“贏的他急难措手，打的他马不停蹄。”（あまりの速攻に敵はなす術なく，防戦するだけで手一杯であった）である。今日では一刻も休まず前進することやずっと働き続けることをいう。現代の用法³⁾：“他每天马不停蹄地干。”（彼は毎日せっせと働いている）

③ “汗马功劳”（汗馬の勞）

本来は“汗马之勞”といい，出征や輸送にかかる労力を意味していた。『戦国策・楚一』には“不費汗马之勞，……。”（出兵の勞を払わず，……）とある。これが後に戦功を指すようになり，『史記・蕭相国世家』では“今蕭何未尝有汗马之勞，……。”（蕭何は戦功を

立てたことがなく、……)と使われている。“汗马功劳”というようになったのは元の時代からで、“汗马”とは騎馬で戦う際に馬が汗をかくほど駆け回るという意味である。現代中国語では軍事面に限らず、よく仕事における貢献をたとえて用いられる。話し言葉としても書き言葉としても用いられ、プラスの評価を表す。現代の用法：“他为公司立下了汗马功劳。”(彼は業績を上げ、会社に貢献した)

④ “走马看花” (馬を走らせて花を見る, “走马观花”ともいう)

“走马”の原義は“骑马疾走”(馬で疾走する)であり、「時間が短い、せわしい」ことのとたとえとなったのは元代からである。この語の初見は唐の孟郊の『登科後』で、孟郊は安史の乱後、代宗、徳宗、順宗、憲宗と4代の皇帝の世を生き延びた人である。当時、唐王朝の統治システムは混乱をきたし、民衆の暮らしは厳しくなる一方であったが、孟郊は科挙に何度も挑戦し、40歳の時にようやく進士に合格した。そのうれしさのあまり我を忘れ、馬を飛ばして長安の街を疾走した折、興に乗じて詠んだのが、“昔日齷齪不足夸，今朝放荡思无涯。春风得意马蹄疾，一日看尽长安花。”という詩である。大意は、「いままでの苦悶の日々は既に過去のものとなり、もはや語るに及ばない。今日は心の赴くまま、しみじみと思いを馳せている。心地よい春風の中、馬を駆って長安を巡り、一日のうちに都の美しい花々をくまなく見て回ろうではないか」、というものであるが、この詩は後に“走马看花”と縮められて意味も若干変わり、大ざっぱに見ることのとたとえとなった。この用法は清の呉喬の『困庐詩話』三、“唐诗情深词婉，故有久久吟思莫知其意者；若走马看花，同于不读。”(唐詩は趣深く、婉曲な表現を用いているため、じっくり吟味しなければ意味を汲み取ることができない。ざっと眺めるだけなら読まないのと同じである)に見られる。現代の用法：“因为时间关系，我们只能走马看花地看一看。”(時間の関係で、私たちは駆け足で見ることができなかった)

⑤ “走马上任” (馬を走らせて赴任する, “走马赴任”, “走马到任”ともいう)

職務を引き継ぐことのとたとえで、今日では話し言葉、書き言葉、それぞれで用いられており、宋の孫光憲の『北夢瑣言』にある“(前略)先以陈公走马赴任。”(先に陳公を赴任させる)に由来している。現代の用法：“他被任命为总经理，下周将走马上任。”(彼は社長に任命され、来週就任することになっている)

⑥ “老马识途” (老馬は道を知っている)

現代中国語ではよく、キャリアの長い人は経験豊富でその道に詳しい、ということをとたとえ用いられる。この用法の初見は『韓非子・説林上』の“……管仲曰：老马之智可用也。”(……管仲は、老馬の知恵は有用である、と言った)であり、老馬を放してその後を付いて行けば道が分かることから、管仲はこう述べたのである。その前後の事情を紹介しよう。春秋時代、齊の国の宰相であった管仲は、君主桓公に従い、孤竹国(現在の河北省盧竜県

一帯)に攻め入った。そもそもこの戦いは、山戎国(現在の河北省遷安県一帯)が燕の国に侵攻したのに端を発しており、齊の桓公は燕に援軍を派遣して山戎を下したのだが、山戎の国王が孤竹に逃げ込んだので、これを追って齊軍は孤竹に至ったのであった。さて彼らが帰路につこうとすると季節は既に冬、齊を出発したのは春のことであり、沿道の景色は完全に様変わりしていた。やがて道に迷い、行く先が分からず誰もが気をもむ中、管仲が言った。「案ずるな、老馬が道を示してくれよう。馬たちは長年の勤で道を見出すに相違ない。」そこで老馬を何匹か選んで先導させたところ、元来た道に戻ることができ、齊軍は無事帰還を果たしたのである。現代の用法：“俗话说‘老马识途’，还是我先做个示范吧。”(「老馬はよく道を知っている」とよくいいます。やはり私がまずお手本になりましょう)

⑦ “指鹿为马”(鹿を指して馬となす)

この成語の出典は司馬遷の『史記・秦始皇本紀』である。秦の二世皇帝の時代、宰相の趙高は謀反をたくらんだが、ほかの廷臣たちが果たして自分の味方になるのか不安を覚えた。そこで趙高は廷臣たちを試し、敵味方を判別しようと、1匹の鹿を二世皇帝に献上して言った。「陛下、これは馬でございます。」「そなた、どうかしているぞ。鹿のことを馬などと言いおつて」と皇帝が笑いながら周りの廷臣たちに同意を求めると、ある者は口を開かず、ある者は馬と言い、またある者は鹿でございますと答えたが、この時鹿と答えた者は、後に趙高によって一人残らず抹殺されたのであった。ここから“指鹿为马”という成語が生まれたが、現在では黒を白と言いくるめることのたとえとなっている。

それにしても、当時の人々はなぜ「鹿」と「馬」を混同したのであろうか。実は、趙高が指した鹿とは馬によく似た鹿であり、宋の羅願は『爾雅翼』で“今荆楚之地，其鹿绝似马，当解角时，望之无辨，土人谓之‘马鹿’。”(荆楚の地の鹿は馬と酷似しており、角を落とすと見分けがつかない。土地の者はこれを「馬鹿」と呼んでいる)と述べている。また十二支で馬は午に配されるが、湖北省雲夢県の睡虎地から出土した秦代の竹簡には“午，鹿也。未，马也。”(午とは鹿のことであり、未とは馬のことである)と記されており、ここから秦以前、午は鹿に当てはめられたり、馬に当てはめられたりと、ある種の「親戚関係」にあったと判断できる。とはいえ、何といても鹿と馬はまったく別の動物であり、だからこそ是非を混同することのたとえとなったと考えられる。

⑧ “马到成功”(馬が乗り込むと成功する)

軍馬が到来するや、たちまち勝ちを制するという意味で、速やかに勝利を取めることを形容する。『元曲選・鄭廷玉「楚昭公」一』の“……管取马到成功，奏凯回来也。”(……管取はすぐさま勝利し、凱歌をあげて戻って来た)が初出で、よく“旗开得胜”(軍旗を掲げた途端に勝利を得る)と共に用いられる。例えば『元曲選外編』108に“……有五百义儿家将，人人奋勇，个个英雄，端的是旗开得胜，马到成功。”(……500名もの若武者たち

馬に関するイメージ考察

は皆勇み立ち、雄々しかった。そして戦が始まるや、たちどころに勝利した)とある。では、なぜ当時“旗开得胜，马到成功”といういい方がもてはやされたのであろうか。それは歴史の中でもかなり長い間、騎兵が最強の戦力として君臨していたためである。およそ800年前、中国北部の草原地域では天候に恵まれた年が続き、人も家畜も活力みなぎり、ジンギスカン麾下の勇猛な騎兵たちは天下無敵の最強軍団に成長し、次々と諸国を制覇して大元帝国を築いた。中原地域の北宋王国は牛による農耕を特色とする農業社会であり、夏、商、周、春秋、戦国、秦、漢、隋、唐と何代にもわたる文化の蓄積があったものの、元に対抗できるほどの軍事力はなく、敵の軍門に降るほかなかった。文化的には劣るが強大な軍事力を誇るモンゴル族の遊牧民が、優れた文化を持ちながら軍事面では太刀打ちできない漢族の農耕民を支配した、つまり馬が「牛」を負かしたのである。現代中国語においてもこの二つの成語はなお息づいており、話し言葉、書き言葉、どちらでも用いられ、プラスの評価を表す。多く仕事のたとえとして使うが、やや誇張気味のいい方である。2002年は「馬年」だったので、人々は口々に“祝你（您）马到成功。”（首尾よく成果を上げられますようお祈り申し上げます）と言って、新年を祝い合っていた。

⑨ “心猿意马”（意馬心猿）

元々は仏教や道教の用語であったが、やがて、飛び跳ねる猿や走り回る駿馬を制し難いように、情念や欲望を抑えきれず、気持ちが落ち着かない様を形容する成語となった。漢の魏伯陽の『参同契』注に“心猿不定，意马四驰。”（心中で猿が騒ぎ、馬が駆け回っている）とある。現代中国語では話し言葉でも、書き言葉でも多用される。例文：“得知她明天就要回家，他已经心猿意马，再也看不下去书了。”（彼女が明日家に帰ると知って、彼はすっかり気もそぞろになり、本を読むどころではなくなってしまった）

⑩ “悬崖勒马”（断崖で馬の手綱を引く）

険しい崖の縁で手綱を引いて馬を止めるという意味で、間一髪のところではたと冷静さを取り戻すことのたとえである。元の鄭徳の『智勇定斉』三、“你如今船到江心补漏迟，抵多少临崖勒马才收骑。”（こうなっては時既に遅し、崖っぷちで踏みとどまってこそ、危機を脱することができるのだ）が初見であり、元曲ではよく“临崖勒马”の形で用いられたが、やがて“悬崖勒马”が主流になった。清の紀昀の『閱微草堂筆記』には“书生悬崖勒马，可谓大智慧矣。”（読書人は瀬戸際で我に返るべきであり、それが真の賢さというものだ）という記述がある。現代中国語でも書き言葉、話し言葉の両面において頻繁に用いられている。例文：“目前还可以挽回，你要悬崖勒马，好好改邪归正。”（今ならまだ間に合うから、ここで目を覚まして真人間になりなさい）

⑪ “天马行空”（天馬が空を行く）

神馬が大空を駆けるという意味で、ダイナミックで自由奔放なことをたとえる。多くは

書き言葉として、詩文や絵画、書道を評する際に用い、プラスの評価を表す。“天马”とは漢の時代、西域の大宛に産した馬の呼称で、「神馬」の意味である。元の劉子鐘の『薩天錫詩集序』には、“其所以神化而超出于众表者，殆犹天马行空而步骤不凡。”（それが神の域に達し、ひとときわ異彩を放っているのは、神馬が大空を飛翔するように豪放で非凡だからである）という文章がある。現代中国語では“他的字飘逸洒脱，如同天马行空。”（彼の字は洒脱でのびのびしており、まるで天翔る神馬のようである）のように用いるが、荒唐無稽な妄想や支離滅裂な文章を風刺して用いることもある。例文：“他写的文章如同天马行空，令人难以置信。”（彼が書く文章は神馬がお空を飛んでるみたいで、首を傾げざるを得ない）

⑫ “万马奔腾”（万馬が疾走する）

無数の馬が猛進するという意味であり、すさまじい勢いで飛躍的に進展する様を形容する。明の凌濛初の『初刻拍案惊奇』22巻に“空中如万马奔腾，树杪似千军拥沓。”（空は万にも及ぶ馬たちが突き進み、こずえは千にも上る軍勢が押し寄せたようである）とある。現代中国語では主に書き言葉として用いられており、プラスの評価を表す。描写的、比喩的な色彩が強い語である。例文：“中原大地处处万马奔腾，生气勃勃。”（中原の地はどこも日の出の勢いで、活気に満ちている）

⑬ “万马齐喑”（万馬が一斉に声をなくす）

古くは“万马皆瘖”といい、宋の蘇軾の『三馬図賛序』には“振鬣长鸣，万马皆瘖。”と記されている。“瘖”は“喑”の異体字であり、「口がきけない、声が出ない」という意味である。この文意は、西域から来た馬がたてがみを振っていないと、朝廷の厩舎の馬は皆鳴くのをやめてしまった、というものである。この成語は後に、人々が沈黙して意見しようとしないうつたこととなつた。清の龔自珍は『己亥雜詩』で“九州生气恃风雷，万马齐瘖究可哀。我劝天公重抖擞，不拘一格降人材。”と詠んでいる。“九州”とは中国全土の別称であり、“恃”は頼りにすること、“究”は何といつても、“天公”は天の神や大自然、“抖擞”は奮起するという意味であり、この詩の大意は次のようなものである。清王朝の支配下にある中国には活力が必要であり、すべてを一新する嵐のごとき社会の大変革だけが頼みの綱である。陰鬱な気が世に満ち、誰もが口を閉ざしているような現状は憤懣やる方ない。神よ、今一度勇み立ち給え。いかなる身分、年齢の者でも構いませぬ、なにとぞ革新の志を抱く多くの人材をこの世に遣わし給え。この成語は、現代中国語では主に書き言葉として用いられ、閉塞的な政局や黙して語らずといった様を形容する。例文：“万马齐喑的年代已经一去不复返了。”（誰もが口をつぐんでいた時代は既に過去のものとなつた）

⑭ “车水马龙”（車、水のごとく、馬、竜のごとし）

『後漢書・明德馬皇后紀』にある“车如流水，马如游龙。”に由来している。車や馬がまるで流れる水や泳ぐ竜のようである、という意味で、車馬の往来が盛んであることを形容

馬に関するイメージ考察

する。『馬皇后紀』によると、馬皇后は馬援將軍の娘で、永年13年(70年)に皇后となったが、後漢史上、指折りの儉約家として知られるのがこの馬皇后であり、彼女は自分の身内といえども手心を加えようとはしなかった。建初2年(77年)、皇帝は慣例に従い、馬皇后の親族の馬廖たちに爵位を授けようとしたが、馬皇后は、「天下のため、私は粗末な衣を身にまとい、贅沢なものを口にしません。私の側近たちも質素な身なりをしています、これも自ら範を示し、臣民を教え導くためなのです。ところが先日、私の親族の家にご機嫌伺いに行く者が、川の流れか、はたまたうねる竜のように車馬の列をなしているのを目にしました。ですから馬氏に爵位を授けることには賛成致しかねます」と言ってこれを許さなかったのである。その後、この言葉は“车水马龙”と縮められ、語義も次第に拡大し、賑やかな光景を形容するようになった。現代中国語では話し言葉としても、書き言葉としても用いられており、マイナスの意味はない。例文：“长安街上车水马龙。”(長安街は人や車の往来が絶えない)

⑮ “单枪匹马”(1本の槍に1頭の馬, “匹马单枪”ともいう)

ただ一人で戦うことであり、多く他人の手を借りず、単独で行動することをたとえる。五代の楚の人、王遵は『烏江』という詩で、“兵散弓残挫虎威, 单枪匹马突重围。”(兵は散り、弓は折れ、威风はもはや見る影もなく、単騎で敵の包囲に切り込んで行く)と詠じた。現代中国語では話し言葉、書き言葉、どちらでも用いられる。例文：“这件事要靠大家共同努力, 一个人单枪匹马地干是不可能成功的。”(この件はみんなで協力して当たらなければならない。一人が独立独歩でやってもうまくいくはずがない)

⑯ “快马加鞭”(駿馬に鞭をくれる)

“快马亦須加鞭”が本来のいい方であり、足の速い馬をさらに鞭打ち、より速く走るよう駆り立てるという意味である。多く、非常に急いでいて、一刻も早く目的地にたどり着きたいといった状況を表す。王安石の『王文公文集』には、“此去还知苦相忆, 归时快马亦須加鞭!”(この旅で互いに慕い合う苦しみを知った、帰りは早馬に鞭を当てねば)という記述がある。現代中国語では話し言葉として、仕事に関して用いられることが多い。例文：“我们若想保持领先地位, 就必须快马加鞭。”(トップの地位を維持するために、もっとピッチをあげなければならない)

⑰ “厉兵秣马”(武器を磨き, 馬にまぐさを与える)

出典は『左伝・僖公三十三年』であり、“束载厉兵秣马”というのが原文である。その記述によると、紀元前627年春、秦軍は鄭の国に不意打ちをかけようとしたが、弦高という鄭の商人がこれを察知した。彼は鄭の穆公の使いに扮し、鄭は防備を万全にしていると秦軍に吹聴し、一方で穆公に急を知らせた。これを受けた穆公が斥候を出し、敵の動静を探らせたところ、秦軍の兵士は武器に身を固め、武器の手入れも余念なく、軍馬にたっぷ

りと餌をやり、すっかり臨戦態勢を整えていた、つまり“厉兵秣马”であったという。その後、この成語は何かのために積極的に準備することのたとえとして用いられるようになった。例文：“世界杯足球锦标赛就要开幕了，各国强手‘厉兵秣马’，争取最佳成绩。”（サッカーワールドカップの開幕が目前に迫り、各国の強豪選手はベストの成績を取めようと、てぐすね引いている）

B. 熟語・ことわざ

今日常用されるもののみを挙げる。

① “马好不在鞍，人美不在衫”（馬の良さは鞍にあらず、人の良さは衣装にあらず）

個人的な話で恐縮だが、このことわざは筆者にとって、とても懐かしい言葉である。というのも、幼いころ、よく母から聞かされていたからで、“马好不在鞍，人美不在衫。你要把时间多花在学习上，不要总打扮。”（大切なのは衣装より中身よ。もっと勉強に時間をかけなさい、おしゃればかりにかまけてちゃだめよ）と言う母の声が今でも耳に残っている。

② “骑着马找马”（馬に乗りながら馬を探す，“骑马找马”ともいう）

現状を維持しつつ、さらにいい仕事を探すことのたとえであり、主に話し言葉として、くだけた場で用いる。例文：“经济不景气时，就业机会相对较少，只能骑马找马，慢慢儿来。”（不景気な時は、就職のチャンスが相対的に少ないから、今の状態を維持しながら、いい仕事を探すしかない、焦らずにやるさ）

③ “路遥知马力，日久见人心”（路遥かにして馬の力を知り，日久しくして人の心を知る）

道のりが遠ければ馬の力が分かり、月日がたてば人の心が分かるというのが直訳で、長い時間がたって、初めて人の本当の性格や内面が分かることのたとえである。例文：“俗话说：‘路遥知马力，日久见人心’。时间长了你终究会了解我的。”（「路遥かにして馬の力を知り，日久しくして人の心を知る」とことわざにあるでしょう。長く付き合えば、あなたはきっと私のことを分かってくれるはずです）

④ “一言既出，驷马难追”（一言既に出ずれば，駟馬も追ひ難し）

口から出た言葉は4頭立ての馬車を駆って追いかけても追いつけない。つまり一度口にした言葉は撤回できないことをいう。例文：“一言既出，驷马难追。说话之前要考虑好，不能随便发言。”（駟も舌に及ばずだ。よく考えてから話すべきで、軽々しい発言は控えなければならない）

⑤ “塞翁失马，安知非福”（塞翁馬を失うも，いづくんぞ福ならざるを知らんや）

『淮南子』の有名な寓話から生まれた言葉である。塞翁の馬が逃げてしまい、近所の人々はそれを気の毒がったが、塞翁は言った。「これが福に転じるかも知れん。」数ヵ月後、塞翁の馬が駿馬を連れて戻ってきたので、誰もがこれを喜んでくれたが、塞翁は言った。「こ

馬に関するイメージ考察

れが災いになるとも限らん。」その後間もなく、駿馬にまたがり調子に乗っていた彼の息子が、落馬して足を折ってしまい、近所の人々はやはり気の毒がったが、塞翁は言った。「これが福に転じるかも知れん。」一年後、近隣の働き盛りの男は根こそぎ召集され、そのほとんどが戦場で命を落としたが、塞翁親子だけは生き長らえたのであった。以上が『淮南子』にある故事であるが、この哲理に満ちた寓話は今も語り継がれている。例文：“这次倒霉但不一定总不顺利，塞翁失马，安知非福嘛！别灰心，打起精神来。”（今回は駄目でも、ずっとうまくいかないというわけじゃない、「人間万事塞翁が馬」さ。気を落とさず、元気を出して）

⑥ “好马不吃回头草”（良馬は後戻りして草を食べない）

後退しないことのたとえである。例文：“好马不吃回头草。既然已决定这么办，就坚持到底。”（優れた馬は後ずさりして草を食べないものだ。こうすると決めたからには、最後までがんばろう）

⑦ “死马当活马医”（死んだ馬を生きているものとして治療する）

ほぼ絶望的な状況になっても、何とかしようとあがくことをたとえる。例文：“你不要对他抱希望了，再努力也是死马当活马医。”（彼に期待を抱くのはやめなさい、これ以上ががんばっても死んだ馬を生き返らせるようなものだから）

⑧ “驴唇不对马嘴”（ロバの口は馬の口に合わない）

まったく無関係のものを一緒にたにすること、あるいは質問と答えがかみ合っていないことのたとえである。例文：“你回答得驴唇不对马嘴。我问的问题你听懂了吗？”（あなたの答えはとんちんかんだ。私の質問の意味を分かっているのか）

⑨ “快马不用鞭催，响鼓不用重捶”（足の速い馬は鞭打つに及ばず、よく響く太鼓は再度打つに及ばず）

賢い人はそれとなくほのめかすだけですぐに理解することのたとえである。例文：“快马不用鞭催，响鼓不用重捶。对她这样的人不用多说，点一下就行了。”（いい馬に鞭はいらず、いい太鼓は一度打てば足りる。彼女のような人にくどくど言う必要はない、ちょっとヒントをあげるだけでいい）

⑩ “三年识马性，五年懂人心”（馬の気性を知るには3年，人の心を知るには5年かかる）

人の心情を理解するには相当の時間を要することをとえる。例文：“三年识马性，五年懂人心。一天半天是不可能了解一个人的。”（馬は3年，人は5年たつてようやく分かるものだ。一日やそこらで一個人を理解できるわけがない）

⑪ “老将出马，一个顶俩”（老将が出陣すれば，人一倍の働きをする）

経験豊富な人は一人で二人分の仕事をこなすという意味である。例文：“老王一上场比分就转败为胜，真是老将出马，一个顶俩。”（王さんが出場した途端、スコアが逆転した。）

さすがベテラン、頼もしい限りだ)

C. その他

語数があまりにも多いため、ここでは使用頻度が比較的高い語を挙げるにとどめる。

① “千里马” (千里の馬)

この語の出典は『戦国策・燕策』である。燕の昭王は国の復興のために賢者を募ろうと考え、郭隗を召し出して助言を求めた。そこで郭隗は、ある君主に仕える小役人が一日に千里を走る馬を手に入れるために、まず死んだ名馬の骨を買ったという故事を語り、これに啓発された昭王は人材の招聘に成功し、史上まれに見る明君となったのである。しかしながら、後世により広く浸透したのは、何といても韓愈が作り出した、千里の馬と伯楽が対になったイメージであろう。

唐の文学者である韓愈は世に名高い『雑説』という短文を残したが、その第四篇（「馬説」の別名がある）で、千里の馬と伯楽の関係になぞらえて、才能がありながら機会に恵まれない自らの境遇を嘆いている。これは専制政治下ではかなり普遍的な問題であったため、数百年の長きにわたり人口に膾炙し、“千里马”は優れた人材の代名詞として大いに広まり、ある種の象徴的な意味を持つようになった。『雑説』の原文の冒頭は、“世有伯乐，然后有千里马；千里马常有，而伯乐不常有。故虽有名马，只辱于奴隶人之手，骈死于槽枥之间，不以千里称也。”（世の中に伯楽がいてこそ、千里の馬が見出される。千里の馬はいつでもいるが、伯楽はいつもいるわけではない。ゆえに名馬がいても、卑しい者によって屈辱的な扱いを受け、月並みな馬たちと共に飼い葉桶の間で朽ち果てていくばかりで、千里の馬よと称えられることもないのだ）というものである。世間に有能な人材はいつでもどこでもいるものだが、人材を発掘する人物は得難いと述べ、作者は不遇な身の上と、胸中の鬱屈や不満を吐露しているのである。中国の馬の鑑定術は殷の時代に始まり、甲骨文にもそれに関する記述が見られる。春秋戦国のころには鑑定の名手が相次いで現れたが、中でも双璧をなすのが伯楽と九方皋であった。伯楽の本名は孫陽といい、伯楽は号である。馬の良否を見分けることに長じており、馬の鑑定に関して豊富な理論と実践経験を有し、『相馬経』を著したと伝えられている。『戦国策・楚策四』に残された逸話によると、あるところに千里の馬がいたが、その才を誰に愛でられることもなく、塩を積んだ車を引いて坂を上らされていた。いたずらに酷使され、疲れ果てた千里の馬を目にした伯楽は、自分の衣服を馬に掛けてやり、その身をなでながら号泣した。理解者に巡り会って激した馬も、天を仰いで長いいななきを上げたという。この故事は、専制政治が有能な人材を埋もれてさせてしまったことを暗喩している。現代中国語では“千里马”は優れた人材の象徴となっている。馬には優劣があり、人にも賢愚がある。ゆえに傑出した人物は“千里马”にたとえられ、“驽马”（駄馬）は凡才の代名詞となった。

② “老驥”（年老いた駿馬）

この語は魏の武帝、曹操の有名な詩『龜雖寿』の“老驥伏枥，志在千里。烈士暮年，壯心不已。”（老いた名馬は飼葉桶に顔を伏せてはいるが、なお千里を駆けたいと思っている。烈士は晩年になっても、壯志が衰えることはない）から来ている。この“老驥”とは年取った馬のことで、老齡の烈士のたとえである。今日では詩の前半のみを用いて、老いてますます盛んで、遠大な志を抱く老人をたとえる。

③ “马虎”（いいかげん）

この言葉の由来として、ある言い伝えが残っている。北宋のころ、都の開封に虎の絵を得意とする画家がおり、ある日、彼が虎の頭を描き終えたところへ友人がやって来て、馬を描いて欲しいと頼んだ。すると画家が虎の頭に馬の体を書き足したため、友人が「それは何という動物か」と尋ねると、画家は「これは“马虎”である」と答えた。彼のあまりのいいかげんさに友人が腹を立てて帰ってしまったので、画家はこの絵を壁に飾っておいたが、これを見た画家の上の息子が「これは何」と尋ねた。画家はいいかげんに「馬だ」と答え、下の息子が同じ質問をすると、またもやいいかげんに「虎だ」と答えた。その後、上の息子は本物の虎に出くわすが、これを馬と思い込み、虎に乗ろうとしてかみ殺されてしまった。また下の息子は馬を見て虎と勘違いし、弓で射殺してしまったのである。これ以降、画家は“马虎”さんと呼ばれ、いいかげんなことも“马虎”というようになったという。現代の用法：“这件事要认真，不能马虎。”（この件は真剣にやらねば。適当にあしらうわけにはいかない）

④ “马大哈”（いいかげんな人）

この言葉は1950年代、何遲が作った「猿買い」という漫才に由来する。以下にその漫才の筋を挙げよう。ある雑貨屋に、いつも“马马虎虎”（いいかげん）で“大大咧咧”（大ざっぱ）、おまけに“嘻嘻哈哈”（へらへら）している仕入れ係がおり、それぞれの言葉から一文字ずつ取った“马大哈”が彼のあだ名となっていた。ある日、その店の責任者が“马大哈”に、「大至急、猿ブランドの石けんを調達しろ。いいか、銘柄は猿、猿だぞ」と電話で指示した。ところがその時“马大哈”は、今夜は思いっきり踊りつてやろうと、そのことで頭が一杯だった。気もそぞろに電話を受けた彼ははてっきり「猿を買え」と言いつけられたと勘違いし、荷車一杯の猿を買ってきたため、店はたちまち上や下への大騒ぎとなってしまった。

この漫才は全国のテレビ局で放送されて人々に強烈なイメージを与え、この“马大哈”という言葉もまた人々の間に広まり、やがては辞書にまで掲載されるに至った。この語の用法としては、次のようなものが考えられる。例文：“护照放在哪儿，你都不记得。你可真是個马大哈。”（パスポートをどこに置いたか、まるっきり覚えてないなんて。君は本当

に間抜けだな)

⑤ “拍马屁” (馬の尻をたたく)

昔、中国の西北地方では中産階級の家なら、たいてい馬を飼っていた。というのも、当時は馬を飼うことが、それこそ命の次に重要なことと考えられていたためであり、モンゴル人の間では“人不出名馬出名”(駿馬を持つことこそ最高の名誉である)ということわざが流行していたほどである。彼らは普段から、馬を引いている時に人と行き交うと、お互いに相手の馬の尻をたたき、「いい馬ですね、いや立派な馬だ」と言い合ったが、この時尻をたたかれている馬も、褒められているのをちゃんと承知しており、高々と尻を持ち上げたという。ここから“拍马屁”という言葉は、褒めるとか称賛するという意味で使われるようになったが、当初はこびへつらうという意味はなかった。しかし人間関係が複雑化するに従い、相手の馬が大した馬でなくても、「大人物にふさわしい良馬ですな」などとお世辞を言う人が現れるようになり、“拍马屁”は「ごまをする」という意味に変わっていったのである。この言葉はこのように用いる。例文：“他常常拍上司的马屁。”(彼はしょっちゅう上司のご機嫌取りをしている)

⑥ “马后炮” (後の祭り)

この語は元々中国将棋の専門用語であり、「馬」の駒の後ろに「砲」を置いて相手を追い詰める一手、いわば王手のことであつた。これがやがて、事が済んでから、もはや何の役にも立たぬような意見や方法を言い出すことのたとえとして用いられるようになった。『元曲選・無名氏「隔江闘智」二』の“……大哥须要计较此事，不要做了马后炮，弄的迟了。”(……兄者、これは一計を案じなければ。手遅れとなつてはなりませぬ)がこの用法での初見であり、今日でも使われている。主に話し言葉として、“是”，もしくは“放”と組み合わせさせて用いるのが常であり、マイナスの意味を持つ語である。例文：“事情都决定下来了，你现在才发表意见，这不是马后炮吗？”(事はもう決まった、今さら意見を言つても、後の祭りじゃないか)

⑦ “马前卒” (馬の手綱を引く兵卒)

唐の人、韓愈の『昌黎集・卷六・符読書城南』にある“一为马前卒，鞭背生虫蛆；……。”(一方は馬丁で、鞭の背には蛆がわいている、……)という詩に由来する言葉である。ここでいう“马前卒”とは車馬を先導し、大声を上げて道を開けさせる従者のことであるが、現在では多く、人に使われる手先のたとえとして用いられる。また自分をへりくだつていう語でもあり、話し言葉、書き言葉、どちらでも用いる。

⑧ “露马脚” (馬脚を露わす)

これは元の時代、ある人が馬の役を演じていた時、隠していたはずの足が見えてしまったという、有名な話から生まれた言葉である。元に著された作者不詳の『陳州糶米』三折

馬に関するイメージ考察

に“这一来则怕我们露出马脚来了。”(こうなったらぼろを出さないようにしなければ)とあるのが文献における初出である。現代中国語では話し言葉としても、書き言葉としても用いられている。例文：“做坏事终究会露马脚的。”(悪事をはたらいても最後には化けの皮がはがれるに違いない)

⑨ “下马威”(下馬の威厳)

地方長官が赴任した際、部下に威光を誇示することで、『漢書・叙伝上』の“定襄闻伯素贵，年少，自请治剧，畏其下车作威，吏民竦息。”に由来する言葉であり、この文の大意は以下の通りである。前漢の班伯は年若くして高官となり、宮中に入出入りして、皇帝の覚えもめでたかった。このころ定襄地方では石、李といった大氏族が朝廷に刃向かい、地方官を殺害するなど物情騒然としており、班伯がこの地へ赴任することを願い出たところ、皇帝の快諾を得て、定襄太守に任じられた。定襄の実力者であった風は、班伯が高潔で、血気盛んな若者であるという噂を聞き、新太守は着任と同時に厳罰をもって臨み、威光を見せつけるだろうと恐れていたが、意外にも、班伯は定襄にやって来るとまず民衆のもとへ足を運び、入念な調査と検討を行った。そして状況を十分に把握してから、優秀な人間を選んで悪党どもを一網打尽にし、定襄の地に治安をもたらした。班伯は真の「威光」を示したのである。やがて、手始めに威厳を示すことを総じて“下马威”というようになった。現代中国語の用法としては、次のようなものが挙げられる。例文：“先来个下马威，让他们知道谁厉害。”(まずは力のあるところを見せつけて、誰が偉いか思い知らせてやろう)

⑩ “走马灯”(走馬灯)

これは観賞用の明かりであり、馬に乗った人の形(もしくは別の形)に色紙を切り抜いて明かりの中の枠に貼り、ろうそくの炎によって生じる上昇気流で枠が回転すると、切り紙の人物がくるくる回るといふものである。人や物事が次から次へと去来し、目まぐるしく移り変わってゆく様子をたとえて“走马灯”というが、多くマイナスの意味合いが含まれる。例文：“他的脑中象走马灯似的，不断回现刚才发生的一切。”(彼の頭の中は走馬灯のようだ、その時々起こったできごとがひっきりなしに駆け巡っているのだから)

さてここまで成語、熟語、ことわざについて述べてきたが、こうした言葉から、馬と戦争、馬と人間がいかに密接に結び付いているか、また人間が馬をどう見ていたか、つまり人々の目や心に映った馬のイメージを読み取ることができよう。それをまとめてみると、A. 馬と人間は有史以来、切っても切れない関係にあり、生産、生活、戦争、輸送と多方面において人間をバックアップしてくれる、最良の片腕である。B. 馬は賢者、優れた人材、そして経験の豊かさの象徴である。C. 馬は成功の先決条件である。D. “万马齐喑”などに見られるように、馬は人間の代名詞である。E. “骑马找马”などに見られるように、馬は「仕事」

の代名詞である。F. 馬は情熱，剛直，躍進，驀進，猛烈，豪快，勇敢，献身，将来性の象徴である。G. 馬は縁起のいい動物である。また，馬は「使役される者」の象徴でもある。

4 民話における「馬」

目下のところ，数ある中国民話集の中でも権威あるものとして，1992年よりISBNセンター⁴⁾から逐次出版されている『中国民間故事集成』が挙げられよう。ここでいう「民話」の概念は広く，中国の各民族に語り継がれてきた散文体の伝承文学には，種々雑多なジャンルやスタイルがあるが，こうしたものも含まれる。つまり神話，伝説，滑稽話，寓話，そしてさまざまな物語，例えば動物が主人公のものや身近な生活を描いたもの，架空のおとぎ話などのほか，ある民族や地域に伝わる独自の形式の伝承文学など，実にバラエティーに富んだジャンルを網羅しているのである。『中国民間故事集成』は現在，吉林巻，遼寧巻，陝西巻，浙江巻，四川巻（上・下），北京巻，福建巻，江蘇巻，寧夏巻，甘肅巻，西藏巻，河南巻と13巻出版されており，これらを調べたところ「馬」に関するものは96篇あったが，ここでは5篇を選び，日本語であらすじを紹介する。中国語の原文については原典を参照されたい。

(1) “神馬”（神馬）

〈陝西巻 P.478～479より〉（あらすじ）

大道河の河畔には美しい小山があり，形が馬の鞍に似ているため馬鞍山と呼ばれている。ここは昔，荒れ果てた沼地で，住む人など皆無であったが，やがてよそから避難して来た人々が住み着き，こつこつと開拓した結果，実り多い土地に生まれ変わった。けれども穏やかな日々は長続きせず，この地の人々の豊かな暮らしをねたんだ洪という地主が，この土地は自分が先祖から受け継いだものだとしてち上げ，地代を払えと言ってきた。人々は憤り，県の役所に訴えたが，あろうことか洪は県知事を買収しており，人々は裁判に負けてしまったばかりか，洪の小作人にされてしまい，辛酸をなめることになったのである。さて，山のふもとに朱九という貧しい男が住んでいた。彼も洪の小作人で，年取った病弱な母親以外に身寄りもなく，たった一人で家計を支えていた。山の斜面にある小作地はチガヤやヨモギが生い茂るひどい荒地で，来る日も来る日もせっせと開墾に励んでいたが，作業は遅々として進まなかった。ある日彼が山へ行き，くわを振るって土を掘り起こしていると，ふと馬のいななきが聞こえた。こちら辺には牛しかいない，きっと洪のところへ偉いお客さんでも来たんだろう，と朱九は思った。が，よく考えてみると，洪の家は東にあり，いななきが聞こえたのは西である。彼は好奇心をくすぐられ，くわを放り出して声

馬に関するイメージ考察

がした方へ走っていったが、西のふもとへたどり着くと、今度は山の中腹の方からいななきが聞こえてきた。急ぎ足で上ってみると、そこには真つ暗なほら穴があり、その中から馬の音がする。朱九は勇気を出し、手探りしながら入っていったが、中はとても深く、奥へ行くほど広がっていた。どんどん進んでいくと突然目の前がぱつと明るくなり、大きな石板の上に立つ金色に輝く小馬が現れた。その馬の背丈は1尺ばかりで、体中から光を放ち、朱九を見ると、まるで旧知の友に会ったかのようにひづめで地をかき、しっぽを振っている。訳が分からず呆然とする彼に、馬が語りかけた。「朱九よ、よく来たな。」朱九は腰を抜かしてしまった。何と馬が口をきいた上に、自分の名まで知っているのである。彼は面食らいながらもべこりとお辞儀をし、やつのことで口を開いた。「来ました……が、あなたは一体……。」「恐れなくともよい、私はお前が善人で、親孝行なことを知っている。そしてここ数日、汗水流しながら山を切り開いているのも見ていた。私はすきを引いて地を掘り起こし、お前を助けてやりたいのだが。」これを聞いて朱九は大喜びしたが、はたと我に返った。こんなちっぽけな馬がすきを引けるわけがないし、第一、すきもないではないか。すると馬は、「心配無用だ、すきは私が立っている石板の下にある。ほら穴から出たらすべて分かるであろう」と言って、石板から下りた。そこで朱九が石板の下を調べてみると、果たしてすきはあった。けれどもそれは1尺四方の小さな小さなもので、彼はそれを手に、馬を引いてほら穴を後にした。ところが穴から出た途端、目映い光は消え、馬とすきは本物と同じ大きさになり、喜び勇んで家に戻った朱九は母親に一部始終を聞かせ、親子共々、相好を崩した。

その後、神馬は朱九の畑ばかりか、村の貧しい人々の畑まで耕してやり、誰もが朱九と神馬に感謝した。しかしこの噂はすぐに洪の家にも届いてしまい、情け知らずの洪剥皮はたちまち不機嫌になった。朱九は自分の小作人であり、神馬が見付かったのは自分の土地だ、それなのに朱九はお宝をねこぼしやがった。そう考えた洪は手下どもを呼び、すぐに朱九を捕まえて神馬を没収し、たっぷりこらしめるよう命じた。手下らは威勢よく飛び出していったものの、朱九の家へ着くや否や、四方から駆けつけてきた村人たちにぼこぼこに殴られ、ほうほうの体で引き下がってきた。洪剥皮は烈火のごとく怒り、自ら手下を引き連れて朱九の家の取り囲み、戸を蹴破って中に入ったが、そこには足元のおぼつかない年老いた母親がいるだけで、肝心の朱九と神馬の姿はなかった。洪の怒りは頂点に達し、手下に命じて家に火を放ち、朱九の老母を自邸へ引っ張っていった。朱九は村でも評判の孝行息子だから、母親を助けるために神馬を差し出すに違いないと踏んだのである。神馬を元のほら穴に隠した朱九は、母親が連れて行かれたと聞くと、洪の家へ一目散に飛んでいった。そして洪剥皮から「馬を取るか、お袋を取るか」と迫られた朱九の目に飛び込んだのは、折檻の末に血を流しながら意識を失っている母親の姿であった。彼は母

親のもとへ駆け寄り、そつと抱きかかえると、洪剥皮に言い放った。「この悪魔め、土地を横取りするだけじゃ飽き足らず、俺の神馬まで奪おうっていうのか。殺されたってお前になんか渡すもんか。」怒り狂った洪剥皮の号令と共に、手下どもがわつと朱九に殴りかかった。が、その瞬間、突然空に轟音が響き渡り、一筋の金色の光が洪家の庭に落ちてきたのである。光の正体は金の鞍を着け、全身目映い光に包まれた神馬であった。「朱九よ、早く母を背負って行け。」そう言うのと、神馬はひづめを高々と上げて洪の手下どもを瞬く間に蹴散らした。そして天高く舞い上がり、ぶるつと身を揺ると、背中の金の鞍が大音声を響かせて落下し、洪家の大邸宅を押しつぶして小山となった。それから神馬は朱九親子を乗せ、遠くへ遠くへと飛び去っていったのであった。

(2) “白马湖” (白馬湖)

〈浙江卷 P.392より〉(あらすじ)

昔、上虞に趙家湖という湖があった。ある日、その湖畔で農夫が畑仕事をしていると、突如鈴の音と共に一筋の白い光が現れた。はて何事かと顔を上げてみると、中空に白馬がいるのではないか。白馬は湖の方へ飛んできたかと思うと、そのままぎぶーんと水中へ飛び込んでいった。農夫は大慌てで村に戻り、このことを村人たちに話したところ、老人が言った。「天から白馬が降りてきたとは、こりゃめでたい。これから先、趙家湖は五穀豊穰に恵まれ、天災地変も起こらんだろう。」そしてこの話が広まると、趙家湖は白馬湖と呼ばれるようになった。

白馬の一件は県知事の耳にも届き、彼はその白馬を皇帝に献上しようと思立った。そして直ちにお供を従えて湖にやって来た県知事は、辺りの農民たちに水車で湖の水を汲み上げるよう命じた。それからというもの、無数の水車が白馬湖の周りを取り囲み、大勢の人々が駆り出され、夜を日に継いでの作業が続き、49日後、ようやく水抜きが完了した。ところが白馬の姿はどこにも見当たらず、県知事は、白馬を目撃した農夫にまんまとだまされたと息巻き、農夫を殺そうとした。すると一筋の白い光が現れ、鈴の音を響かせながら白馬が飛んできて、湖のほとりに悠然と降り立ったのである。県知事は急いで馬に縄をかけるよう命じて首尾よくこれを捕らえ、大喜びで役所へ戻り、皇帝に貴重な馬を献上したい旨を述べた上奏文を都に送った。

やがて皇帝から、多額の褒美と高官の地位を与えるので、白馬と共に上京せよとお達しが下った。そこで県知事は大喜びで白馬を連れてこさせ、貫禄たっぷりのところを見せてやろうと、馬にまたがった。が、その瞬間、白馬が不意にいななきを上げ、竜の刺繍が施されたまりが飛んできた。この拍子に、県知事は馬から転げ落ち、そのまま帰らぬ人となったが、人々は、空高く飛び去る白馬を見送りながらひそかに快哉を叫んだのであつ

馬に関するイメージ考察

た。それから白馬湖には平和な日々が訪れ、いつまでもいつまでも豊作に恵まれたという。

(3) “齐林神马”（齐林の神馬）

〈西藏巻 P.192より〉（あらすじ）

齐林郷の人々は馬の飼育をとりわけ好み、どの家でも馬が飼われているが、この辺りの馬には際立った特徴がある。全身を産毛のように柔らかな体毛で覆われ、よく肥えてたくましく、放たれた矢のように走るのである。

言い伝えでは、昔、古格王の王宮の両脇に二つの山があり、王宮は左右の山によって日夜外敵から守られていた。ある日、格薩爾王が古格王を殺そうと単騎で乗り込んできたが、二つの山は巨人が合掌するように、轟音を響かせながら合体し、格薩爾王の前に立ちはだかった。格薩爾王は顔色を失い、馬首をめぐらせて引き下がろうとしたが、彼を乗せた栗毛馬が言った。「格薩爾王ともあろうお方が、ひるんではなりません。あなたは必ずや敵を打ち倒すことができます。私もまたこの難関を越えて見せましょう、気性激しい栗毛馬の名にかけて。」そして機をうかがい、二つの山のわずかな隙間を稲妻のように擦り抜けたのだが、この時、両側の山がさらに接近したために、栗毛馬のしっぽの毛が1本挟まれてしまった。

このしっぽの毛には不思議な接着力があり、そのおかげで二つの山は一体化したまま離れなくなってしまった。これ以降、この山は飛馬山と呼ばれるようになったが、あの不思議な毛は後に清流となり、今なお飛馬山から流れ落ちている。齐林郷の馬がよその馬と違うのはこの川の水を飲んだおかげ、という言い伝えから、毎年競馬祭りの前の晩になると、人々は出走馬を連れて優勝祈願のために川のほとりへやって来る。馬にこの川の水を飲ませ、合掌して栗毛馬のご利益を願うのがこの土地の古くからの伝統であり、それは今も人々の間に息づいているのである。

(4) “石马”（石の馬）

〈四川巻上 P.275～276より〉（あらすじ）

1933年6月、石馬場へ到達した紅軍は大々的な宣伝活動を行った。至る所にスローガンを書き付けていた宣伝隊は、石の馬の背にも“赤化全川”（四川全体を共産主義化する）と刻み、傷ついていたその足を修復してやった。紅軍到来の知らせに辺りの地主たちは震え上がり、一部の反動的な武装集団やならず者たちは人里離れた山奥へと身を潜めたが、大悪党の王樹森は向家梁一帯に1000人余りの武装集団をかき集めて自ら団長となり、ほかの親玉たちと徒党を組んで九竜場を奪取し、石馬場を焼き払った。人々から怨嗟の声が上がると、紅軍は悪党一味を退治すべく、精鋭の騎兵部隊を編成し、遊撃隊と連携して夜襲をか

けようと計画したが、それはたやすいことではなかった。というのも、向家梁の両側は切り立った崖であり、敵の根城に行くには真ん中の険しいでこぼこ道を通るしかないのだが、敵は左右の要害に堅固なトーチカを築き、その上下左右に機関銃を設置していたのである。王樹森は、「この難攻不落の砦なら、紅軍に翼が生えても上ってはこれまい」と豪語していた。

向家梁攻撃の噂は広まったものの、半月ほどたっても動きは見られず、悪党どもは、紅軍は手も足も出せずにいるのだと信じ始めた。ところがある晩、にわかには銃砲の音が鳴り響き、悪党一味はあっけなく退治されたのである。

後日、捕虜となった兵士が語ったところによれば、神馬が紅軍を乗せて上ってきたのだという。あの夜、1頭の勇猛な白馬が最前線に突っ込み、銃声がかしたかと思うと、赤い光の中に紅軍の大軍勢が現れ、紅軍の馬は皆一様に、背に“赤化全川”のスローガンを躍らせながら、敵の根城を目掛けて一直線に突進していった。悪党どもは火器を総動員して、嵐のように銃弾を浴びせかけたが、馬は神出鬼没で、その数は増えていくばかり。やがて悪党一味は完全に浮き足立ち、逃げ道を探して右往左往したが、その行く手はことごとく騎兵隊によって阻まれた。そして彼らの馬の背には“赤化全川”のスローガンが……。ここに至って、動転していた大隊長の脳裏にぼんやりとある光景がよみがえった。このスローガン、そうだ、あの石の馬の背に刻まれていたではないか。彼は瞬時にすべてを了解し、すぐに大声で叫んだ。「やめろ、打つな、石馬場の神馬が奇跡を起こしているんだ。」これを聞いた悪党どもはすっかり肝をつぶし、おとなしく武器を捨てて降参したのであった。その一件の後、体中に弾痕の残る石馬場の石の馬を見るに及び、人々は口々に言った、この石の馬が何千もの神馬を呼び、紅軍と共に敵を討伐したのだと。

(5) “烧纸人纸马”（紙の人や馬を燃やす）

〈河南卷 P.350～351より〉(あらすじ)

紂王の祖母の大葬に先立ち、紂王の愛妃、妲己は、死者の従者として500人の子供を共に葬ることを提案し、丞相の比干が全国を回って子供たちを集めることになった。

比干は供を連れてある村へ行き、村人を全員呼び集めてお触れを読み上げ、子供を差し出すように命じた。けれども村人たちが土下座して、泣きながら子供の命乞いをするのを見た比干は身につまされ、手を下すことができなくなってしまった。

かといって、役目を放棄するわけにもいかず、あれこれ思案した末、わらや竹ひごを束ねて人形をこしらえ、新しい服を着せて子供の身代わりにすることをひらめき、部下を各村へ送って子供のいる家庭にこれを実行させたのである。誰もが我が子を死なせたくない一心で、せつせと夜なべして子供の身代わりを作り、大葬の日の早朝に墓へ運んだのであつ

馬に関するイメージ考察

た。

さて大葬の日、500人の子供は集まったかと尋ねる紂王と妲己は大層上機嫌であったが、すべてが済んだ後、妲己はだまされたことを知り、比干を殺してやろうと考えた。そして彼女が何やら耳打ちすると、紂王は比干に、「お前は策士らしいな。心臓に七つの穴がある者は人を欺くのがうまいという。お前の心臓に七つの穴があるか見てやろう」と言い放ち、人に命じて彼の心臓をえぐり出してしまった。

比干は死後、大臣の夢枕に立って、「今後、子供を殉死させてはならぬ。子供の人形を燃やせばそれが冥界で子供となる」と告げた。これ以降、裕福な家庭で人が死ぬと、子供の人形をこしらえて豪華な衣装を着せ、これを燃やして死者に付き従わせた。時には子供の人形のほかに、車や馬、家などを作り、墓前で焼いた。

そして庶民もこれにならない、墓前で紙製の人や馬を燃やし、死者のお供とするようになったのである。

以上に挙げた(1)、(2)、(3)はいずれも馬の不思議な力にまつわる話であり、貧者や庶民を助け、困難を解決し、災難を振り払うなど、馬の降臨によって庶民が幸せになっている。(1)の民話の神馬は初め「金色に輝く小馬」の姿で登場するが、馬の色を「金」という字で表現した字が甲骨文字にもある。「𨾏」がそれで、意味は読んで字のごとく、金色の馬であるが、ここでいう金色とは実は「銅色」のことである。青銅器文化は殷代に最盛期を迎え、青銅は主として華麗で荘厳な祭器や楽器、兵器などの鑄造に用いられていた。人々の目には、これらの道具が極めてありがたいものとして映り、時がたつにつれ、青銅の色もまた尊ばれるようになった。こうした経緯の中で馬の色が銅の色、すなわち「金」とされたのは、殷の時代、馬が役畜として有用であると評価されていた証である。このことと前述の「金色に輝く小馬」が直接関連しているとは限らないが、やはり馬文化の側面を間接的に反映していると考えられよう。現代の視点でこの「金の馬」を捉えても、「金色の神馬」は「金銭、財産」の「救世主」として貧しい者を救済した、という解釈が可能であろう。(2)の物語では天から舞い降りてきた白馬が庶民を救うが、「天馬」の出現はめでたいしるしであるという考え方は古代から存在した。古代の馬の鑑定術では一貫して「天馬」は吉兆であり、「天馬」が現れれば凶が吉に転ずるとされていたが、これもまた、古来より人々が馬を靈獣と見なしていたことの表れである。(4)の民話からは、「馬」と「戦争」の結び付きを読み取ることができよう。これは近代の話であるが、歴史を概観すると、馬は古代の戦においても非常に大きな役割を果たしていた。『後漢書・馬援伝』には“馬者、甲兵之本、国之大用。”(馬とは軍備の基本であり、国の主力である)とあり、『説文解字』は“馬、怒也、武也。”(馬は激しく勇ましい)と馬の字を解釈している。(5)の民話にある“紙馬”(紙の馬)で

死者を弔う風習は、中国の数多くの民族に共通して見られるものであり、庶民の間に広く浸透している。その起源は殷・周時代の馬を祭る風習にさかのぼり、宋代には“紙馬”を商う店が、さまざまな“紙馬”を売り出した。元代になると“紙钱”（冥界で通用するとされている紙幣）と“紙馬”は、もはや清明節の墓参に欠かせないものとなり、明・清以降、“紙钱”と“紙馬”を燃やして死者の霊を慰める風習は広く行われ、今日に至っている。葬祭において馬は重要な役割を果たしてきた。本物の馬をシンボルライズしたものが“紙馬”や“俑馬”（馬をかたどった副葬用の土人形）であり、早期には本物の馬を副葬させた帝王や貴族も存在したが、これは現世で必要なものは来世においても必要であるという思想によるところが大きい。昔も今も葬祭文化には馬にちなんだ風俗習慣が多いが、これは実社会で目覚しい働きをする馬が人々から崇敬され、重視されたからにほかならない。

5 「馬」と十二支⁵⁾

後漢の王充は『論衡・物勢』で、“午，亦火也，其禽，馬也。”（午は火でもあり、獣では馬に相当する）と述べている。古代の陰陽五行説では、12の干支を五行に当てはめ、寅と卯は木、巳と午は火、辰、未、戌、丑は土、申と酉は金、亥と子は水に属するとされる。『論衡』の“午，亦火也”という記述はここから来ているのであり、“其禽，馬也”とは、午は十二支の動物では馬に比定される、という意味である。先人たちは午や馬を解釈するに当たり、よくこうした表現を用いた。例えば、明の王達は『蠡海集』で“午为阳极，显易刚健，以马配之，马快行。”と記しており、この文意は、午が馬に当てはめられるのは、馬は力走する姿が勇壮であるため、陽が極まった直後の状態である午のシンボルとされている、というものである。明の郎瑛も、午は陽極の象であり、馬を午に配するのは、俊足で壮健な馬こそ陽気が極致に達した状態を具現するにふさわしいからであると述べている。また、変化や発展をも重視する陰陽では、午は陽の極ではあるが、同時に「陰」への起点でもあるとされている。午や馬を解説する際、先人たちは抜かりなくこの点にも言及しており、『松露館贅言』には“午者，阳极而一阴甫生。马者，至健而不离地，阴类也，故午属马。”（午とは陽極に一陰がきざした状態である。馬は極めて壮健であるが地を離れることはなく、陰に属するため、午に馬を当てるのである）とある。これは昼夜を12等分し、十二支で時間を表す古代の時法の観点からの解説であり、午の刻に陽の気が極に達し、陰の気が芽生える。また馬という動物は四肢を宙に浮かせて駆け回るが、頻繁に大地を踏みしめる。宙を舞う動作は陽、地を蹴る動作は陰であり、馬は陰と陽の間を闊歩することから、十二支では午に馬が当てられることになったという。

何年生まれの何年なにとしであるか、というのは十二支信仰のかなめといえよう。午年生まれの

馬に関するイメージ考察

人は馬に似るなどというが、生まれ年によってある動物に似るという考え方は、実は太古の動物に対する崇拜意識の名残である。古代人は、人類と動物の間には何か神秘的なつながりがあると考えていた。彼らは動物と接触を重ね、それを詳細に観察していくうちに、動物の中には自分より強く獐猛なものや、特殊な能力を持つものがあることに気が付き、畏怖や羨望の念を抱くようになり、それが崇拜へと発展し、こうした動物の特殊能力を自分の身にも宿したいと思うようになった。馬のように速く走りたい、牛のように力持ちになりたい……、という具合である。そして動物の能力を取り入れるのに最も効果的な方法とされたのが、その動物の肉を食べることであった。今日でもよく、「類は類をもって補う」といい、例えば虎の骨を食べれば筋骨隆々になるとされている。また大胆で無鉄砲な人のことを、「彼は豹の肝を食べた」などということもしばしばである。こうした観点もまた現代社会に残る、原始シャーマニズムの名残といえよう。肉を食べる以外に、動物にあやかした名前を付けたり、動物を干支とするなど、動物の名を身に帯びてその動物の能力を取り込むことも行われた。先人たちは年を表すのに動物を用い、その人が生まれた年の十二支の動物のように無事健やかに成長するよう、あるいはその動物の特殊能力や加護が得られるよう祈願した。つまり十二支の動物を干支にして、自らその動物に「従属」することで、自分と動物の間にある種の霊的なつながりを持たせる。こうすれば生まれ年の動物の特性がその身に宿ると考えられていたのである。また、十二支の動物は年を表す序数としても用いられたため、生まれ年の動物がその人の守護神とされ、日本でその年の干支に当たる人を年男・年女というように、自分の干支の年を特に“本命年”などという。

午年生まれの人は、深層意識においてシャーマニズム的な縁で馬と結ばれているらしく、その性格や運命、結婚、事業、将来など、何かと馬と因縁があるようである。役畜である馬は一生あくせく働くが、絶えず仕事に追われる午年生まれの人は、思わず自分の運命を馬と重ね合わせる。“旗开得胜，马到成功”という古語が物語るように、馬が古代、軍事面で果たした役割は絶大であり、軍馬の質と量が戦争の勝敗を決したことも少なくない。十二支文化は古くから伝わるものであり、これを知らない人などいないであろう。たとえ家から一歩も出たことがなく、字の読めない人であろうと、その年の干支が分からなくても、自分の干支を答えられないことはまずあり得ない。また、相手の年齢を尋ねる時、“你多大年纪了？”(年はおいくつですか)とあからさまに聞くのを避けて、よく“你属什么的？”(あなたの干支は何ですか)という。2002年は午年だったので、年賀状でも、春節聯迎晩会でも、“马到成功”(馬が乗り込むと成功する)の4文字がひとときわ目を引いた。

さらに「干支占い」も中国で広く普及しており、北京の自由市場の文具を扱う露天には毎年必ず「干支占い」の小冊子が並ぶ。これは庶民に伝わる占いであり、作者や出版社などは明記されていないが、「庶民」から発しているという点、ある種の新鮮味が感じられる。

次に2002年（午年）版から、冒頭の「性格」の欄を取り上げてみよう。

“据说生于马年的人性格开朗，思维敏捷，装扮入时，善于辞令，洞察力强，多变的性情会导致脾气的急躁，产生暴跳如雷，怒火中烧，属马人一般会轻易坠入情网，也会轻松的脱离情网，各种情况表明属马人在年轻时离家者居多，即使留在家中，他们的独立精神也总是促使他们从年轻时期就开始自己的事业，他们精力充沛，但急躁鲁莽，他们最大的优点是自信心强，有代理能力和理财能力，不墨守成规的属马人穿着入时，好显示和表现自己，他们着装规整，洁净，款式奇特，但不俗气，属马的人通常喜好智力锻炼和体育活动，人们可以从他们灵巧的举动，优美的身姿和急急的说话速度上看到这一点，他反应迅速，能当机立断，他们的动摇和少耐心的弱点常被灵活开朗性格所弥补，由于属马的人性情急躁，固执，脾气火爆，所以不能不促使他们心急图快，缺乏持久性，属马人生性乐观喜好玩乐，贪图享受的花花公子和娇娇小姐，出生在马年的也是最多，属马人做事灵活机智，聪明锐敏，善于见风使舵，灵活多变，他们喜欢交朋友，但他不过分借助和依赖，喜好自食其力，自力更生，属马的男女都会很富有，他们在花钱上大手大脚，他们爱显露头脚，慷慨大方是他们的特点，通常是不善于节俭和珍惜。”（訳：午年生まれの人は性格が明るく、頭の回転が速い。また服装もファッショナブルで話し上手，鋭い洞察力を持つが，ころころ変わる性格が災いしてイライラが募り，腹の虫がおさまらず，怒りを爆発させてしまうこともある。午年の人は恋愛に関して熱しやすく冷めやすい。若いうちに家を出る人が多い，というのも午年に顕著に見られる傾向で，たとえ家にとどまっても，早く自分の事業を立ち上げようという独立心に常にかき立てられている。精力旺盛だが，せっかちで無鉄砲な午年の人の最大の長所は自負心が強く，代理や財テクの才に恵まれている。既成概念にとられない午年はおしゃれで，自己顕示欲が強く，そのファッションはきちんとして清潔感があり，一風変わっているが洗練されている。普段から知性を磨き，体を動かすのを好むが，彼らの機敏な動作や端麗な容姿，そしてスピーディーな話し方にそれがよく表れている。また機転が利き，臨機応変に対処することができる。動揺しやすく根性が足りないというウィークポイントがあるが，柔軟かつ陽気な性格がこれをカバーしている。午年生まれは気短で強情，そして怒りっぽく，この気性が焦燥感をいやが上にもあおってしまい，粘り強さに欠ける。楽観的で遊び好きな性分なので，享楽に溺れる遊び人のうち最多を占めるのが午年である。融通がきいて機知に富み，頭脳明晰で，機を見るに敏な午年の人は，形勢を見て身を処すのがうまく，変わり身が早い。社交家だが，かといって他力本願ではなく，人に頼らず自分の力で生きていくのを良しとする。午年生まれは男女を問わずリッチで，金遣いが荒い。目立ちたがり屋で，気前がよく，けちけちなしないのが特徴で，節約したり物を大切にしたりするのが苦手である）

6 終わりに

言語習慣や民話、十二支における「馬」を眺めてみると、馬の意義が多方面にわたっていることが分かる。その大半は良いイメージではあるが、「高貴」でありながら「低劣」であり、「ポジティブ」な意味合いの比喩もあるが「ネガティブ」な色彩の比喩もある、という点は否めない。これは馬に対する人々の認識がまちまちであることに起因している。馬は人間の生活の中で最もなじみ深い動物であり、その見方は、馬を捉える角度によって変わってくるものである。軍事と縁の深い馬は、戦いに付き物と考えられていた。かつて戦場を駆けて功労を立てるための重要な切り札であった馬は、事業、前途、貢献と結び付けられた。力持ちで健脚の大型家畜である馬は、「大きい」、「速い」などの意味を付与された。古代、中原地域では馬が不足しており、これを所有していたのは主に帝王や貴族、国家に限られ、さらにそのほとんどが輸入に頼っていたため、馬には「高貴」という意味が派生した。とはいえ、所詮畜生で、人から使役される動物であり、ひたすら労役に駆り立てられて一生を終える馬は、「低劣」という意味も帯びるようになった。馬には優劣があるように、人にも賢愚があることから、逸材をたとえて千里の馬というようになり、その対極にある駄馬は凡才のたとえとなった。これらはごく一部の例に過ぎないが、このように、すべては異なる角度から馬を捉えて異なる見方をし、さらに“以馬及人”（馬を中心に据えて人間を見る），“以馬及物”（馬を中心に据えて物事を見る）という思考法で、適宜、馬に意味を付与していった結果なのである。言語習慣において、馬がかくも多様な意味を有しているのは、馬に対する文化意識が既に人々の心の奥底にまで浸透し、集団意識を形成していることの証なのである。

注

- 1) 古代中国には高度な“相馬術”（馬の鑑定術）が確立していた。“相馬”の“相”は観相の相で、人の顔立ちから吉凶を推量し、未来の運命を予測するように、馬の鑑定家は馬の外見（頭・目・耳・尾・ひづめなど）の特徴からその品種の優劣を見極め、優良品種を選定した。
- 2) 各語の後ろに言葉そのものの直訳を付したが、直訳が不可能なものは転義を示すことにした。
- 3) 現代の用法に関しては、筆者による作文である。
- 4) ISBNは“民間文学集成全国編集委員会”の略称である。
- 5) 十二支の由来については拙稿2002年8月「牛のイメージに関する一考察」（愛知大学『言語と文化』第7号）を参照されたい。

主要参考文献

- (1) 郝懿行 『爾雅義疏』 北京市中国書店影印本
- (2) 邱崇西 (1983) 『俗語五千条』 陝西人民出版社
- (3) 北京大学中文系 (1987) 『歇後語大全』
- (4) 鄭宣沐 (1988) 『古今成語詞典』 中華書局
- (5) 劉潔修 (1989) 『漢語成語考釈詞典』 商務印書館
- (6) 張清常 (1990) 『胡同及其他』 北京語言学院出版社
- (7) 武占坤・馬国凡 (1991) 『漢語熟語大辭典』 河北教育出版社
- (8) 吳裕成 (1993) 『人与十二属相』 天津大学出版社
- (9) 馬如森 (1993) 『殷墟甲骨文引論』 東北師範大学出版社
- (10) 袁柯 (1993) 『中国神話通論』 巴蜀書店
- (11) 王紅旗 (1997) 『神妙的生肖文化与遊戯』 山東友誼出版社
- (12) 張皓 (1997) 『十二生肖』 湖北教育出版社
- (13) 史有為 (1997) 『成語用法大辭典』 大連出版社
- (14) 『漢語大詞典 簡編下』 (1998) 漢語大詞典出版社
- (15) 『語海』編輯委員会 (1999) 『語海』 上海文芸出版社
- (16) 『古代漢語詞典』 (1999) 商務印書館